

女たちの観音堂  
－「せんおくり」でつなぐもの－

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
家族機能・社会臨床クラスター  
新谷 眞貴子

私は、A町で生まれ育ち、教職に就き、子育てを経験し、大学院でこの町の子育て支援の研究を始めた。子育て支援に関する調査を進めるなかで、この町に古くからある「観音堂」に出会った。

観音様の祀られている観音堂に、6人の女たちは、毎週同じ時間に集まる。ものづくりをするためである。この女たちは、観音堂のある村で、70年から90年近く生きてきた。

本研究の目的は、この町の子育て支援の研究をする私が、観音堂という「場」に身を置き、この町の多くの出来事を見て人々と共に生きてきた女たちの語りを通して、この町にある土壌と、観音堂で出会った「せんおくり」という言葉・文化を明らかにしていくことにある。そこから、この町の子育て支援の手掛かりを見つかることができると思われる。

女たちは、15年程前から観音堂でもものづくりを始めた。いつもの場所に座り、語り合いながら、おのおののペースで編み物や折り紙等をする。教え、教えられ、自分の納得したものを仕上げる。また、休憩のお茶の時間も楽しむ。「ここに来たら元気になる」と言う。

女たちへの聴き取りは、観音堂のオープンスペースで行った。ライフストーリーに耳を傾けたり、この町の出来事や人々の生活、戦争体験について質問を投げ掛けたりした。また、共にものづくりをし、問わず語りの言葉を心に留め、流れる空気を感じた。こうして、女たちの語りや「観音堂の世界」に浸っていくうちに、私自身の変容があった。この町にずっとあったもの、人を育てていくもの、つまり、この町の「豊かな土壌」が見えてきた。

観音堂で初めて聴いた「せんおくり」という言葉もその一つである。「前の世代の姿を見て、順ぐりに次世代の人たちが育っていく」という意味で概ね使われる、明治時代の人々から引き継いできた言葉だ。「親が一生懸命生き、その姿を見て育った子どももまた、一生懸命生きている。せんおくりやなあ」と語る話や、さまざまな人生のなかにあった「せんおくり」の物語を聴き、世代をつないで人を育てる、この言葉の力の大きさを感じた。

女たちが創ってきた「場」は、仲間と共に明日への元気を得る「場」になっていた。振り返ると、そのような「場」を持たなかった私は、子育てに葛藤した。現在子育てをしている人たちには、観音堂のような「場」が必要であると考えた。仲間と共に思いを語り合い、子育てをする力を得られる「場」を創る手助けをしたいと私は思う。また、本研究で見えてきた、わが町の風景、歴史、文化等の「豊かな土壌」について、住民全体に発信したい。この町の「豊かな土壌」で子どもも大人も育つ意義を考えてみてほしい。

本研究によって、この町の子育て支援の手掛かりが示唆された。本研究で得たものを、「せんおくり」で次世代の人たちにつないでいくことが私の役割である。